＜書評＞

田中研之輔　著
『都市に刻む軌跡　スケートボーダーのエスノグラフィー』

（新曜社，2016年，四六判上製274頁，3200円＋税）

有國　明弘

本書の著者，田中研之輔が研究に着手した2000年代には，スケートボードは路上に湧出していた代表的な〈下位文化〉であったという．しかしながら昨今では，2020年の東京オリンピックの正式種目として採用されることが決まり，スケートボードは注目を浴びつつあるカルチャーとなり，若者を中心に世界中で競技されている．しかし，そのような光景が見られるようになったのは，ごく最近のことであり，田中が調査を行った当時のスケートボードの練習場所といえば人気のない空き地や広場，〈ストリート〉であった．そのような環境でスケートボードをする若者たちを見て，「なぜ，若者たちはフェンスに囲われた暗がりの広場でスケートボードをしているのか（236頁）と疑問を抱いたのが本書の出発点であるという．

スケートボードを媒介に形成される若年集団を対象にするにあたり，田中は以下の三つの問題関心を設定している．①スケートボードという文化的行為に向けられる「社会の眼」に関する問題，②スケートボードという文化的行為を生み出す「身体の経験」に関する問題，③スケートボードへの身体的な没入と時間の投資がもたらす「行為の帰結」についてである．これらの問題に対応し，本書では相互行為の経験的分析を通じて，都市に形成される下位文化集団が行為者たちのいかなる行為や，集団を取り巻く諸環境との相互行為の集積によってどのようにして生成され，維持されるのかという，そのメカニズムと実践の内実を解明しようと試みている．加えて田中は，都市下位文化集団へのコミットメントと文化的行為の継続が，いかにして彼らの社会空間の移動を導いていくのかについても探っていっている．

第１章では都市下位文化集団の社会的世界に迫るため，初期シカゴ学派都市社会学，バーミンガムの初期カルチュラル・スタディーズ，ポストサブカルチャーズ研究の蓄積から，理論と方法について整理，検討している．田中は都市民族誌的手法が用いられてきたこれらの研究を概観し，下位文化的行為が特権化され，文化的行為を取り巻く社会的・経済的背景が看過されていること，民族誌的記述と理論構築とが乖離していることといった疑問点を指摘している．また，これまで都市民族誌は，社会諸関係と都市空間の枠組みが切り離されて論じられがちであった．しかし近年では，生きられた経験を通じて空間を対象化する記述の試みがなされているも，その記述と方法の困難さ

から都市下位文化集団を記述することへの新たな課題も提示している．これらを踏まえ本書は，下位文化集団の社会的世界の意味分析を展開しつつも，集団の担い手の社会的立場，集団を取り巻く社会構造，集団を取り巻く物理的空間，社会的空間，象徴的空間の社会学的分析に取り組んでいく．なお，ここでは茨城県土浦駅前西口広場を利用する22歳から28歳までの男子15名，東京都新宿駅東南口の路地裏に集まる21歳から32歳までの男子19名で構成される2集団を調査対象としている．

第２章では，スケートボードを媒介に若者がいかに出会い，いかなる場所で集団を形成していくのか，集団の形成過程と集団が生成する場所の分析を行っている．田中は，スケートボードという行為をストリートでの文化的活動，スポーツ的な身体活動，非行・逸脱的行動といったこれらの領域を揺れ動きながら生み出されている実践と考え，行為者か他者かによって認識がそれぞれ異なる文化的行為をめぐって，都市では日々交渉と折衝が繰り返され，下位文化が都市に根付いていくメカニズムを捉えている．

第３章では，田中が実際にスケートボーダーの集団に入門者として所属し，その集団が「キャップ，Tシャツ，太めのズボン」といったスタイルや，「ぐりった」「大根おろし」「事故った」などの特有の言語を共有していること，彼らが都市空間の建造物を自分たちの行為対象に読み替え，怪我への恐怖を乗り越えながら難易度の高い技に挑戦することでスケートボーディングへの快楽を見出していることを，参与観察から明らかにしている．

これらの文化的行為をもとにして集団を形成する若者は，文化的アイテムと集団内外のコミュニケーションを共有することで集団への帰属意識を強めている．しかし本書における重要な発見とは，スケートボードによる快楽とリスクの身体的経験と，それに伴って得た「痛み」を共有することが集団への帰属意識を維持するのに最も重要な役割を果たしていることを見出した点である．

第４章では，スケートボーダーが利用する若者専用広場における集団内の役割や規範，ジェンダーについて分析している．ここで田中は，スケートボードによって媒介される文化集団においては，怪我や痛みを恐れることなく，難易度の高いトリックを習得するため自己の身体に徹底的に向き合っていくマスキュリニティ的側面が男女を問わず見られることを確認している．このスケートボーディングによって身体に刻み込まれた痛みを，前章で見てきた働きのほかにも，集団を構成する上での卓越化や秩序化，集団内での自己存在を内面化する働きをしていると分析している．

第５章では，公共空間の利用をめぐる立場の相違からスケートボーダーと他のアクターとの間で生じたコンフリクトを解消すべく，専用広場獲得のため署名活動を展開してきた若年集団の様子を追っている．土浦駅西口広場での事例では，若年集団は主体的な活動と市民ネットワーク組織との協力によって，広場の獲得を実現させたものの，結果的に広場の獲得は，逸脱的な不良行為としても認識されうるスケートボードの活動場所を囲い込み，管理する動きとなっていった．さらには，若年集団は地元組織との恒常的な関係を構築できなかったため，彼らが他の社会集団と一定の距離をとりつつ，独自の社会的世界を保持していくことになったという経緯を，田中は当事者たちへのインタビューから導き出している．

第６章では，これまでの都市下位文化研究は身体化された行為がもたらす帰結について看過して

きた点を批判し，都市下位文化集団に帰属しているスケートボーダーたちの軌跡という身体的な行為の帰結を社会空間の移動から捉えることで，都市下位文化を媒介に形成された集団の社会的軌道を見出そうと試みている．結果として，都市下位文化集団へのコミットメントが自らの居場所と自己肯定感を高める働きをしつつも，地元の下請け工場への就職や高卒でアルバイトを繰り返すといった，自身らの進路選択をする意思決定の軽視をもたらしていた．このことから田中が捉えたのは，集団で共有される文化を媒介にして社会的な再生産に加担しているにもかかわらず，意識的に構造をかえていく行為を生み出せず，この先への不安，辞めたくても辞められない職場といった社会的な痛みを身体に上書きしていく若者たちの現状であった．

結論の章では，スケートボードという都市下位文化から以下の４つの結果が提示される．すなわち，①行為に対する認識をめぐる問題，②集団的な相互行為過程としての分析，③都市社会から隔離された孤立集団ではなく，都市社会のポリティクスと無縁ではないこと，④相互行為に費やす時間的経過の分析を通じて得た結果を提示する．加えて，都市空間における下位文化行為には，場所の限定化や行為の制度化など行為を統制する力が作用すること，　都市下位文化集団は文化的行為を共有し創出していく過程で，行為の担い手たちの社会空間での移動を規定し社会的な再生産装置として機能していることを明らかにした．最後に田中は，各々の思い描く社会空間の移動を導くには，下位文化的行為を客観的に捉え，自身の身体資本をいかなる資本へと転換していくかという的確な認識と戦略が不可欠であると論じている．

後半では，評者が本書から考えた論点を中心に述べていく．従来の研究では，都市下位文化集団の構造やシステムに対する「抵抗」のニュアンスを含み得る行為を捉えてきたのに対し，本書では我が国におけるスケートボードという文化的行為を媒介にして形成される集団を，都市空間ないしは社会空間の移動から捉えている点，文化的な帰属が社会への「抵抗」ではなく，むしろ身体に刻み込まれているがゆえに集団の描く軌道を受け入れていき，再生産されていくという結果が得られた点は大変興味深い．また，多様な学業的，家庭的背景の若年集団の15年間の経年変化を追うことによって，学校から職場への移行の中での都市下位文化に着目している点に本研究の独自性を感じる．

しかし一方で，田中は若者がスケートボードに没入していく要因を単に「探求・深化・共有の面白さ」と説明している．学校から職場への移行に着目しているのであれば，文化的行為への没入・継続に向かわせる背景として，行為者が関与しているコミュニティ間で生じる相互作用からの体験にもより注意が向けられるべきだったのではないかと評者は考える．例えばそれは，学校，階層，職場および家庭環境などである．

田中は，個人の学校から職業への移行期，職業の履歴といった行為者達の軌跡の記述することで，集団で共有される文化が彼らの社会的軌道を規定し，再生産する機能があることを導き出しているが，そこで重要になるのは，個人が集団からどのような影響を受けたことによって，集団の軌道に埋め込まれていくのかという論点である．しかし本書では，個人の軌跡を分析していく際に，集団内の構成員同士の相互行為に関する記述が希薄なため，個人と文化集団との影響関係が描かれていない．個人の軌跡をみていくことで，アルバイトを繰り返したり，辞めたくても辞めれない仕事に

就くなど，スケートボーダーたちはみな同じような道を歩んでいるということは明らかになった．その一方で，彼らがそのような進路選択をしていく要因を生み出す集団の内実については，個人と集団とが切り離されて記述されているため，見落とされているのではないか．この文化集団内での行為者間の言動といった内実の分析なしに，本書が集団の社会的軌道を述べているということに評者は疑問を抱く．

田中が本書の調査を行なっていた同時代の論文に，新谷（2002）がある．新谷は，若者が「フリーター」を経験するプロセスや，それに対する若者集団の下位文化の影響力について，同じく都市下位文化であるストリートダンスグループへの調査から，以下のように述べている．すなわち，ローカルの限られた人間関係での場所・時間・金銭の共有が「地元」での生活を成り立たせており，この「地元つながり文化」を維持するため，彼らはこの生活に適合的なフリーターとなることを選択していくということ．また，彼らが学校外の下位文化に居場所やアイデンティティを見出し，埋め込まれていった背景には，学業体験や家庭経験，就職や親による拘束への抵抗，親の職業・経済力が効果的に作用していること．

新谷論文の若者にとって，学校，家庭から離脱したとき，彼らのアイデンティティを支えた学校外文化の存在は重要である．新谷は場所・時間・金銭を共有できる「地元つながり文化」を文化集団での若者たちの相互行為から見出し，それを重要視している彼らが，「地元」で「フリーター」という相対的に低位な状態を自ら選びとっていくプロセスを解明している．このことから，本書においてもスケートボードという学校文化外での文化的活動の，集団としての下位文化の内実を理解する必要があるのではと考える．

次に，本書における方法の問題という論点についてである．田中によると，その調査方法は，ヴァカン（Wacquant 2004=2013）に倣ったものだという．ヴァカンは，「身体を問いのツールとして，知識のベクトルとして展開する」ことを目指し，空間と身体との関わりの中で生じる場所がいかなるものかを「行為の味わい，痛み，社会的世界の音と激しさをしっかりと伝え解読していく」ために，実際にボクシングジムに入会し調査した．田中もこれに倣い，実際に自身の身体を投じ，身体に書き込まれる経験をも調査対象とする方法をとったという（44頁）．しかし評者は，本書の中に田中の身体を感じることができなかった．単にスケートボードを買い，行為者たちに教えてもらいながら基本を習得しただけで，身体と時間を賭けてスケートボードに没頭する若者の実態は捉えられるはずはない．基本を習得した後，オーリーやその他の技（＝トリック）を習得するため，身体に恐怖や怪我を刻み込みながら練習する田中の姿を，評者は最後までうかがい知ることはできなかった．ヴァカンに倣った「身体を問いのツール，知識のベクトル」として用いる手法をとるのであれば，「キャップ，Tシャツ，太めのズボン」といった文化的アイテムを身につけ，トリックを習得するために怪我をも恐れず身体を賭ける彼らの文化的営為により迫ることが，スケートボーダーの軌跡をみていく上では必要だったのではないか．「本書の目的とはスケートボードを媒介に形成される都市下位文化集団を対象に，集団と集団を取り巻く諸環境との相互行為の経験的分析を通じて，下位文化集団の生成過程と実践の内実を明らかにすることにある」（6頁）と述べているにもかかわらず，田中はスケートボードという文化的行為が抱える固有の社会的世界のリアリティに肉薄できていない．スケートボーダーの社会的軌跡はわかったが，文化的営為のリアリティに迫ることこそ，

彼らの軌跡をより的確に把握するために最も重要だったのではと評者は考える．

田中は，ヴァカン（Wacquant 2004=2013）の共訳者でもあるが，本書の手法からは，田中の，スケートボードによって身体に刻み込まれてゆく経験と痛み，文化的活動・身体的活動・逸脱的活動の領域を行き来することによるスケートボーダーの日常的実践の様子が生き生きと感じられず，訳書で描かれているような記述とは乖離がある．スケートボーダーの身体化された資本と田中の身体に刻まれている経験との差は，書中の「スケーター撮影」の写真と「筆者撮影」の写真の撮り方の違いからも明らかである．前者はスケーターがトリックをしている決定的な場面を，躍動感が伝わるように被写体にかなり接近して撮影されている．これは彼らが日々見ているスケートボードマガジンや動画の撮影の仕方を意識していたり，ここが一番の見せ場だという瞬間を身体的に会得し共有している現れであろう．一方後者は，トリックをするスケーターを中心に，パーク全体を捉えるように撮影している．スケートボーダーの身体に刻み込まれた経験から創出される視点ではなく，観察者として文化的営為を捉えようとする田中の写真は，自身がスケートボーダーに迫りきれていないことを象徴しているといえよう．

評者もまた，ストリートダンス実践者であり，同時に若者の下位文化を研究対象としている．実践者（当事者）であることと研究対象の距離感との問題は，松村（2014）を始め多くの議論がなされているが，その意味でも本書は，大変示唆に富むものであった．本書で取り上げているような文化集団は他にもたくさん存在しているに違いない．田中も本書中でそう述べている（246頁）．そして，このような問題に直面している若者にとって，本研究は有益な方策を見つけ出すための一助となり得るであろう．しかしながら，スケートボードやストリートダンスなどのいわゆる〈ストリート・カルチャー〉や，他の都市下位文化全般に当てはめることができるのならば，本書で導き出した都市下位文化集団における地位の再生産機能は，上述したように新谷が既に明らかにしている．そのため評者が本書に期待していたのは，新谷も描けていなかった都市下位文化集団の担い手としての彼らの生きられた軌跡がいかに記述されているのかであった．今後は各々の下位文化集団の若者が見ている固有の社会的世界のありように迫った，次段階の研究展開がなされなければならないだろう．

[文献]

新谷周平，2002，「ストリートダンスからフリーターへ――進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: 151-69.

松村和則，2014，「『フィールド』を持って研究するという事――二重の『負い目』と『大文字の学知』」『スポーツ社会学研究』, 22(2): 9-21.

Wacquant,L., 2004, *Body & Soul: Notebooks of an Apprentice Boxer*, New York: Oxford University Press.（＝2013，田中研之輔・倉島哲・石岡丈昇訳『ボディ＆ソウル――ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』新曜社．）

大阪市立大学大学院文学研究科 前期博士課程 人間行動学専攻社会学専修
ありくに あきひろ
akiakigeneration@gmail.com